

令和 2 年 5 月 29 日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16826

研究課題名(和文)主語の格標示に関する統語理論の言語獲得からの実証的研究：熊本方言を対象にして

研究課題名(英文) Empirical Studies of Syntactic Theory on Nominative Case Marking of the Subject in First Language Acquisition: From the Kumamoto Dialect in Japanese

研究代表者

團迫 雅彦 (DANSAKO, Masahiko)

九州大学・人文科学研究院・専門研究員

研究者番号：50581534

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、標準語と熊本方言の間で、談話的解釈によって主格の形態的標示が異なることに基づき、「主格助詞の形態的具現化に関するパラメータ」を提案し、幼児の自然発話を対象にして、理論的検証を試みた。その結果、(i)幼児文法における誤用の属格主語は「中立叙述」や「総記」といった談話的要因に依存せずに具現化すること、(ii)属格主語の誤用は、規範的語順であるS(0)V文とは異なり、非規範的語順である(0)VS文では現れないことから、幼児文法では主語がTPを越える移動を行う場合に限り、大人と同様のTP投射が備わった文構造が発現すると主張した。これは統語操作としての移動が主格の認可を促すことを示唆する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、従来検討されてこなかった幼児の属格主語の誤用を談話上の要因から捉え直したこと、および、語順により誤用が発現しなくなることを明らかにしたことにある。特に、後者の点は、語順が幼児の文産出に影響を与えていることを示唆しており、幼児文法が備えている統語的特性は文によって変容する可能性がある。また、本研究の社会的意義は、語順が言語運用に影響を与えるメカニズムを言語獲得の観点から示すことで、言語発達遅滞児、失語症者、日本語学習者に対する支援に繋がりをすることである。

研究成果の概要(英文)：Based on the fact that morphological marking of nominative case differs between the standard Japanese and Kumamoto dialect according to topic/focus interpretation, this study proposes “A parameter on morphological realization of nominative case in Japanese” and conducts its theoretical verification. As a result, two important findings are shown: (i) Erroneous genitive subject in child grammar realizes regardless of the discourse factors such as neutral description and exhaustive listing. (ii) Erroneous genitive subjects are not attested in non-canonical (0)VS order in contrast to canonical S(0)V order. This leads to the conclusion that adult-like sentence structure with full TP projection activates in child Japanese only if the subject moves higher than the TP projection. The theoretical consequence of this study is that movement as the syntactic operation drives the licensing of nominative case.

研究分野：言語学

キーワード：言語獲得 生成文法理論 主語 パラメータ 格標識 語順 談話的要因 右方転移

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

生成文法理論研究において、主格 (Nominative Case) 標示のメカニズムの解明は文構造の精緻化に向けた重要な課題の一つである。日本語の主格標示の特異な点は、中立叙述や総記といった談話的要因による解釈の相違が生じること、状態述語文の目的語や多重主語構文の大主語への主格標示が可能であることが挙げられる (Kuno (1973))。統語論的な観点からは、このような「主格標示される要素が構造的にどの位置に生じるのか」を明らかにすることで、上記との特性がなぜ生じるのかという問題に対する原理的説明が可能になる。しかしながら、従来の研究では共通語を対象にしており、形態的には「ガ」の一種類のみでしか現れないため、構造的位置を明確に示す直接的な証拠が十分に得られているわけではなかった。

### 2. 研究の目的

これに対して、Nishioka (2014) は Miyagawa (2010) で提案された C から T への [topic/focus] 素性の継承による Agree システムの枠組みに基づき、「熊本方言において topic/focus 解釈のない主格主語は TP に移動する必要がなく vP 内で「ノ」として標示され、topic/focus 解釈を受ける主格主語は TP 内で「ガ」として標示される」という一般化を示した。これにより、共通語では topic/focus 解釈の有無に関わらず「ガ」で表されるが、熊本方言ではその解釈によって「ガ」あるいは「ノ」で表されるという主語に標示される格の形態的具現化に関する言語間変異があることが示される。これを原理とパラメータのアプローチ (P&P approach) の枠組みで捉え直すと、「日本語の主格助詞の形態的具現化に関するパラメータ (以下、「主格パラメータ」と略述)」があると考えられる。Nishioka (2014) の分析が正しければ、日本語母語話者は言語入力に基づき、母語が共通語タイプなのか熊本方言タイプなのか、パラメータ値を決める必要がある。Sawada, Murasugi and Fuji (2010) によると、大人では本来「ガ」として具現化されるべき主語が幼児発話においては「ノ」として標示されるという観察を行っている。Subset Principle (Berwick (1985)) を考慮すると、幼児は熊本方言をこのパラメータのデフォルト値として設定している可能性がある。幼児が同様に topic/focus 解釈によって形態的に異なる主格助詞を用いるのであれば、この「主格パラメータ」の妥当性が高まり、主格標示の構造的位置の解明にもつながる。本研究は生成文法理論に基づく言語獲得研究によって、日本語の主格助詞の形態的具現化に関するパラメータの妥当性を検証し、主格標示される主語の構造的位置を解明することを目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究の目的に基づき、子どもの属格主語と前後の文脈から、どのような談話解釈になるかを検討するために、CHILDES データベースを用いて縦断的自然発話の観察を行った (研究 )。また、属格主語が現れない環境がどのようなものかを考察するために、非規範的語順である (O)VS 文も調査の対象に加えた (研究 )。加えて、獲得過程における主格助詞の脱落が規範的語順 S(O)V と非規範的語順 (O)VS 文でどのように異なるのかも調査した (研究 )。また、主語を認可する TP がどのように獲得されるのかを考察するために、動詞語幹と活用語尾がどのような過程を経て発現するかを調査した (研究 )。

これらに関係する部分として、TP よりも上位の機能投射が日本語ではどのように発達するかを考察するために、日本語の終助詞と間投詞 (研究 ) ならびに wh 付加詞と補文標識「の」の獲得についても調査を行った (研究 )。

また、日本語だけでなく、英語の母語獲得過程でも TP がどのように獲得されるのかを考察するために、助動詞 *do* の一致に関する研究を行った (研究 )。

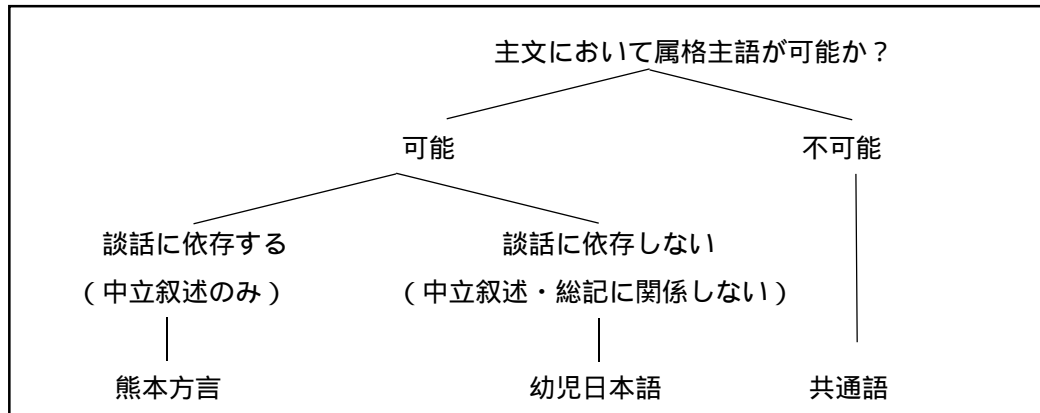
最後に、これらの研究を補完する意味で、子どもの文理解に関する予備的検討を行った。本研究は主語を扱っているものであるため、分裂文の主語 (研究 ) と、副詞節内の主語 (研究 ) を対象にした。

### 4. 研究成果

当初の予定以上に、本研究は研究期間中に様々な展開を見せた。以下では、その概要をそれぞれ述べていく (日本語と英語を含む)。

#### [1] 研究 : 幼児の誤用の属格主語と談話解釈についての研究

本研究は、共通語と熊本方言の主文における主語の格標識の形態的差異に基づき、「主語の形態的具現化に関するパラメータ」を提案した。その上で、幼児発話の「誤用」の属格主語はこのパラメータ値が熊本方言と同じく、属格指定がなされているために起こることを述べた。ただし、熊本方言では中立叙述解釈のみ属格主語が現れるのに対し、幼児発話では中立叙述・総記解釈に関係なく属格主語が生起するため、属格のパラメータ値は格標識の具現化が談話に依存するタイプの言語 (熊本方言) と談話に依存しないタイプの言語 (幼児言語) に細分化されることを主張した。



[2] 研究 : 幼児の誤用の属格主語と語順の関係を調べた研究

本研究では、日本語を母語とする幼児の獲得過程において、主語の格助詞の「誤用」が規範的な S(O)V 語順では見られるが、主語と述語が倒置された(O)VS 語順(右方転位文)では観察されないことを報告した。例えば、(1)のような S(O)V 文では主語を与格や属格で標示することができる(Sawada, Murasugi and Fuji 2010 など)。

- (1) a. 猫ちゃんに行くんだって。 (Tai, 2:3)  
 b. たいしょう君の作った。 (Tai, 1:11)

一方で、(2)のように(O)VS 文において右方転位された要素は主格主語のみが観察される。

- (2) 怪我したの、おじさんが? (Aki, 2;6,29)

また、述語の後に生起する与格名詞や属格名詞は、(3)のように主語としての解釈が得られない。

- (3) a. パラいた、ここに。 (Aki, 2;6,29)  
 b. こうやって、この。 (Aki, 2;6,15)

下記の Table 1 に示したこれらの観察に基づき、獲得過程においては S(O)V 語順では主語の顕在的な統語移動が必ずしも必要ではないが、一方で(O)VS 語順では主語が必ず TP 指定部を經由して移動するために主格が大人と同様に付与されると考えることで、この語順の違いに関する非対称性が導き出せる。

Table 1. Number of Utterances for Case Markers Attached in the Right-Dislocated Position and the Proportion Used as the Subject

	Nominative <i>-ga</i>	Dative <i>-ni</i>	Genitive <i>-no</i>
Aki	4/4 (2;6-3;0)	0/6 (2;6-2;11)	0/5 (2;6-2;9)
Ryo	7/7 (2;6-2;11)	0/7 (2;6-2;11)	0/5 (2;8-3;0)
Tai	11/11 (2;1-3;1)	0/30 (1;8-3;1)	0/5 (2;2-2;7)
Jun	90/90 (2;3-3;0)	0/22 (2;3-3;0)	0/14 (2;3-3;0)
Sumihare	58/58 (1;11-3;0)	0/5 (2;2-3;0)	0/4 (2;2-2;3)
Total	170/170 (100%)	0/70 (0%)	0/33 (0%)

[3] 研究 : 幼児発話における主格助詞の脱落と語順の関係についての研究

本研究では、日本語を母語とする幼児の獲得過程における主格助詞「ガ」の脱落について、語順と動詞の種類から考察を行った。その結果、Table 2 に示すように、(i) 動詞の種類に関係なく規範的語順 S(O)V 文とは異なり、非規範的語順(O)VS 文の方が、「ガ」の脱落が少なくなること、(ii) 他動詞を用いた非規範的語順で「ガ」の脱落がほぼなくなること、(iii) 語順に関係なく非対格動詞と非能格動詞では「ガ」の脱落に有意差がないことが示された。

Table 2. The number of production on the nominative case particle *-ga* according to verb types and word order by a Japanese-speaking child Jun (2;2-2;9)

	<i>Unaccusatives</i>		<i>Unergatives</i>		<i>Transitives</i>	
	SV	VS	SV	VS	SV	VS
+GA	98 (32%)	50 (61%)	26 (39%)	17 (68%)	62 (81%)	39 (98%)
-GA	204 (68%)	32 (39%)	40 (61%)	8 (32%)	15 (19%)	1 (2%)

[4] 研究 : 日本語を母語として獲得する幼児の TP についての研究

本研究は、動詞に接続する諸形式や主格助詞に注目し、日本語を母語として獲得する幼児がどのように TP (時制句) を投射するかについて考察した。具体的には、(1) 動詞語幹と時制辞が接

続する形式において、(異なり語数が)生産的に増える時期はどの時期なのか。(2) ある任意の動詞に複数の活用形が見られるのはどの時期なのか。(3) 主格助詞が接続する名詞の意味役割について、theme 項ならびに agent 項が現れるのは上記の(1)と(2)と対照させ、どの時期なのかを特定する。本研究では、CHILDES データベース (MacWhinney 2000) における Aki コーパス (Miyata 1995) を用い、幼児 1 名 (Aki) の自然発話の中から動詞文と主格助詞をそれぞれ取り出した。その結果に基づき、本発表では、幼児は (i) 動詞語幹と活用語尾が分化しておらず、どの項に対して主格を付与しない段階、(ii) 動詞語幹と活用語尾が分化するようになるが、theme 項にのみ主格を付す段階、(iii) agent 項にも主格を付す段階を経ると主張する。

[5] 研究 : 終助詞と間投詞の発達に関する研究

モダリティー表現には話者の認識を表すもの(epistemic modal)と、聞き手への関与を示す発話に関するもの(utterance modal)がある。日本語では法助動詞や終助詞とモダリティーとの間に強い関係性が見られるが、同様のことは文頭に現れる間投詞でも観察される。本研究では言語獲得過程において、モダリティーがどのように発達するのかについて、幼児の縦断的自然発話を観察した。その結果、(i) 終助詞が間投詞よりも早く現れること、(ii) Table 3 に示すように、ある時期までは、認識を表すモダリティーは間投詞のみ、そして発話モダリティーは終助詞のみに限られることが観察された。

Table 3. Number of utterances on epistemic and utterance modal with predicates according to a position occurred in a sentence by a Japanese-speaking child Aki (1;05,07 – 2;03,00)

	Sentence-initial (Interjection)	Sentence-final
Epistemic Modal	21	0
Utterance Modal	0	23

(FET, two-tailed  $p < .01$ )

主格助詞が現れるのは、この時期を過ぎてからになるため、TP の獲得はモダリティー句よりも遅れることが示唆された。

[6] 研究 : 理由を表す *wh* 付加詞と補文標識「の」の獲得に関する研究

本研究では、日本語の理由を表す *wh* 付加詞「なぜ」が文末の補文標識「の」と共起しなければならないという現象に着目し、桑原(2011)で提案された「なぜ」の認可に関する統語理論の妥当性を日本語の母語獲得のデータを用いて検証することを目的とした。桑原(2011)では「の」は Fin の位置を占める機能範疇であり、それが文内に現れることで CP 構造が活性化し、LF で「なぜ」が *wh* 素性を照合するために IntP まで移動することで文が派生されるとしている。この議論が正しければ、言語獲得に関して以下の二つの興味深い予測を生む。すなわち、(i) 日本語を母語として獲得する幼児は「の」の獲得が「なぜ」疑問文よりも前、もしくは同時期でなければならない。(ii) 幼児が発話する「なぜ」疑問文には「の」が必ず含まれていなければならない。これらの予測を CHILDES データベース(MacWhinney 2000)を用い検証を行ったところ、(i)と(ii)はともに予測通りの結果であることが確かめられた。

[7] 研究 : 幼児英語の助動詞 *do* の一致と統語移動の関係についての研究

本研究では、否定文と疑問文における助動詞 *do* の一致に関する非対称性を扱った杉崎(2016)を概観し、その問題点を指摘した。さらに素性継承のタイミングに関するパラメータを代案として提示し、上述の非対称性現象を説明した。また、*be* 動詞を含む否定文の際に義務的に一致が起こることに着目し、V-to-T パラメータの設定が素性継承のタイミングに関するパラメータの設定を駆動することを提案した。

[8] 研究 : 分裂文に関する実験についての研究

本研究では、従来の日本語の分裂文の理解に関する実験の再検討を試みた。團迫・水本(2007)は、先行文脈をつけても、目的語分裂文の正答率は上がらないことを示している。しかし、目的語分裂文の先行文脈と提示された実験文の前提部は異なっているのに対し、主語分裂文では全く同じになっている。つまり、先行文と前提部が同じだからこそ、主語分裂文は理解が容易であったと考えられる。本研究では、実験の予備的検討として、かき混ぜ文を先行文脈として用いた実験文を検討した。

[9] 研究 : 副詞節内の主語の理解に関する研究

子どもは母語獲得において、言語経験(入力)が質・量ともに十分ではないという「刺激の貧

困 (Poverty of the Stimulus)」の問題に直面するにもかかわらず、複雑で抽象的な言語知識を備えた文法体系 (出力) を発現させる。生成文法理論では、入力に還元できない出力を可能にするのが、生得的な言語知識の集合である「普遍文法」とされる (Chomsky 1965、1980)。母語獲得研究では、Crain and Nakayama (1987) 以来、言語獲得の初期段階においても抽象的な統語構造に依拠した言語産出や言語理解が観察されることが報告され、構造依存性 (structure dependence) という普遍文法の特徴が生得的に存在する強い根拠とされてきた。一方で、Pullum and Scholz (2002) などは、「刺激の貧困」という前提自体に懐疑的な見方を示し、入力是不十分ではなく豊かであり、言語経験から複雑で抽象的な言語知識を獲得可能であるとしている。構造依存性に関する母語獲得研究は、要素間の依存関係が「構造的な近さ」か「線形順序上の近さ」のどちらに基づいているかを検証してきた (Crain and Nakayama 1987 など)。しかし、入力に直接的に聞き手に示す統語情報には、要素間の線形順序が含まれている。そのため、入力から類推により一般的な規則を抽出することが可能になり、「刺激の貧困」に対する反論の余地が生まれてしまう。これを回避するためには、要素間の依存関係が統語範疇に関連する統語的制約により決定されるという現象を用いた場合でも、構造依存性に依拠した振る舞いを示すことができるかを調べる必要がある。「統語的制約に違反してはならない」ことは入力に明示されることはないため、このような豊かな入力に成立し得ない状況において、「刺激の貧困」を再検証しなければならない。

本研究では日本語の副詞節における主格主語を扱う。南 (1974、1993) で示されているように副詞節は主節への従属度により A 類、B 類、C 類の三種類に分けられ、副詞節の内部構造は従属度により補部を取る句が異なる (A 類の補部: VP (動詞句)、B 類の補部: TP (時制句)、C 類の補部: ModalP (法助動詞句))。ここで重要なのは、副詞節内の時制辞を主要部とする TP (時制句)の有無により、主格主語の解釈が異なることである。下記のように、A 類 (ナガラ節) には、TP が含まれず、主格主語は主節の主語と解釈される。一方で、TP が含まれている B 類 (ノデ節) と C 類 (カラ節) では、主格主語は副詞節内の主語であり、主節の主語と解釈することはできない。これは、主格主語はそれを認可する TP 内に留まらなければならないという統語範疇に言及した統語的制約が作用していることを示唆する (cf. Takezawa 1987)。主格主語が TP を含む副詞節を越えて、主節に関係づけることは制約に違反することを意味する。

- |     |   |
|-----|---|
| A 類 | お姉ちゃんが [VP パンを食べ]ながら、ピアノを練習する (練習 = お姉ちゃん)          |
| B 類 | [TP お姉ちゃんが帰ってきた]ので、ピアノを練習する (練習 = 話し手)              |
| C 類 | [ModalP [TP お姉ちゃんが帰ってきた] だろう]から、ピアノを練習する (練習 = 話し手) |

主格主語を副詞節と主節のどちらに関係づけるかは、TP を含むかどうかによって依拠するものであるため、副詞節における主格主語の解釈は構造に依存すると捉えることができる。さらに、TP のような統語範疇および「統語的制約に違反してはならない」ことは入力そのものに含まれてはいないため、本研究ではこの現象を用いることで従来の研究の不備を補いつつ、構造依存性を順守するかどうかを検証することを目的とする。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Dansako, Masahiko	4. 巻 36 (2)
2. 論文標題 Subject Case Marking and Right Dislocation in Child Japanese	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 English Linguistics	6. 最初と最後の頁 214-226
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 木戸康人・團迫雅彦・一瀬陽子	4. 巻 10 (1)
2. 論文標題 日本人英語学習者による結果構文の習得 複合パラメータとの関係性を手掛かりに	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近畿大学教養・外国語教育センター (外国語編)	6. 最初と最後の頁 23-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 團迫雅彦・木戸康人・一瀬陽子	4. 巻 134
2. 論文標題 クラウドソーシングを利用した第二言語習得研究：韓国語を母語とする日本語学習者の統語的複合動詞の産出に注目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 比較文化研究	6. 最初と最後の頁 23-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 團迫雅彦	4. 巻 11
2. 論文標題 英語の母語獲得過程における助動詞doの一致：パラメータの連動という観点から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 英文学研究支部統合号 (九州英文学研究)	6. 最初と最後の頁 343-356
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="https://doi.org/10.20759/elsjregional.11.0_343">https://doi.org/10.20759/elsjregional.11.0_343</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 一瀬陽子・團迫雅彦・木戸康人	4. 巻 132
2. 論文標題 第二言語習得研究におけるクラウドソーシング利用の可能性についての考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 比較文化研究	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木戸康人・團迫雅彦・一瀬陽子	4. 巻 9 (2)
2. 論文標題 日本語学習者の中間言語－韓国語日本語学習者による統語的複合動詞の習得の観点から－	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 近畿大学教養・外国語教育センター (外国語編)	6. 最初と最後の頁 117-142
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 團迫雅彦	4. 巻 なし
2. 論文標題 主文における主語の形態的具現化：幼児の属格主語と熊本方言の比較から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本言語学会第154回大会予稿集	6. 最初と最後の頁 224-229
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 團迫雅彦	4. 巻 なし
2. 論文標題 日本語を母語として獲得する幼児の TP について：動詞語幹・活用語尾・主格に注目して	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本言語学会第155回大会予稿集	6. 最初と最後の頁 366-367
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 團迫雅彦	4. 巻 なし
2. 論文標題 英語の母語獲得過程における素性継承について：一致の非対称性現象からの考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 フェーズ理論とカートグラフィ分析に基づく節構造の実証的研究 周辺現象から核心へ（平成 27 年度～平成 29 年度科学研究費助成事業基盤研究（C）研究成果報告書	6. 最初と最後の頁 37-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 團迫雅彦	4. 巻 -
2. 論文標題 子どものことばから大人の文法が見える！ - 日本語の主語の格助詞に注目して -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『外国語の非 常識：ことばの真実と謎を追い求めて』	6. 最初と最後の頁 77-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 一瀬陽子・團迫雅彦・木戸康人	4. 巻 -
2. 論文標題 韓国語母語話者日本語学習者及び中国語母語話者日本語学習者における統語的複合動詞の習得	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『ことばを編む』	6. 最初と最後の頁 62-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 DANSAKO, Masahiko
2. 発表標題 Right Dislocation and Subject Case Marking in Child Japanese
3. 学会等名 Generative Approaches to Language Acquisition in North America (GALANA 8) (国際学会)
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 團迫雅彦
2. 発表標題 日本語を母語として獲得する幼児の TP について：動詞語幹・活用語尾・主格に注目して
3. 学会等名 日本言語学会第155回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 團迫雅彦
2. 発表標題 英語の母語獲得過程におけるSubject-Verb Agreementの非対称性とその統語分析
3. 学会等名 日本英文学会九州支部第70回大会シンポジウム
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 團迫雅彦
2. 発表標題 日本語を母語とする幼児の右方転位文における主語の格標示について
3. 学会等名 日本言語学会156回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 團迫雅彦
2. 発表標題 幼児の「誤用」の属格主語とその用法についての統語分析
3. 学会等名 言語科学会第20回国際年次大会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 團迫雅彦
2. 発表標題 理由を表すwh付加詞と補文標識「の」の獲得
3. 学会等名 日本言語学会第153回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 團迫雅彦
2. 発表標題 主文における主語の形態的具現化：幼児の属格主語と熊本方言の比較から
3. 学会等名 日本言語学会第154回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考